

駐劄隊歴史附 近世關係

朝鮮京城ニ我駐劄隊ヲ置キシ起因

我帝國公使護衛居留民保護ノ為メ駐劄隊ヲ京城ニ置キシ實ニ明治十五年八月二十日濟物浦ニ於テ日韓兩全權委員ノ間ニ締結セラレシ條約ニ基キ世之ヲ濟物浦條約ト稱ス其全文左ノ如シ

濟物浦條約

日本曆七月二十三日朝鮮曆六月九日、我朝鮮ノ凶徒日本公使館ヲ侵襲シ職員多ク難ニ懼リ朝鮮國聘スル所ノ日本陸軍教師亦慘害セラル日本國ハ和好ヲ重スル為メ妥當議辨シテ即チ朝鮮國ニ下記ノ六款及別訂續約ニ款ヲ實行スルヲ約シ以テ懲前善後ノ意ヲ表ス且是ニ於テ兩國全權大臣ハ記名捺印シテ以テ信憑ヲ照ニス

第一
今ヨリ二十日期シ朝鮮國ハ凶徒ヲ獲シ巨魁ヲ嚴究シ重ニ從テ懲辦スル事

日本國ハ員ヲ派シテ立會處斷セシム若シ期日凶ニ捕獲ス能ハサルハ億サニ日本國ヨリ辨理スヘシ

第二
日本官吏ニシテ害ニ遭ヒタルモノハ優禮ヲ以テ瘞禁シ以テ其終ヲ厚フスル事

第三
朝鮮國ハ五萬圓ヲ支出シ日本官吏ノ遭害者ノ遺族並ニ身傷者ニ給與シ以テ禮卹ヲ加フル事

第四

凶徒ノ暴舉ニ因リ日本國が受ケル所ノ損害公使ヲ護衛スル海陸兵
費ノ内五十萬圓ハ朝鮮國ヨリ填補スル事

毎年十萬圓ヲ支拂ヒ五ヶ年ニシテ完済ス

第五節

日本公使館ハ兵員若干ヲ置キ敬言衛スル事

兵營ヲ設置修繕スルハ朝鮮國之ニ任ズ

若シ朝鮮國ノ兵民律ヲ守ル一年ノ後日本公使ニ於テ警言
備ヲ要セズト認ムル時ハ撤兵スルモ差支ナシ

第六節

朝鮮國ハ特大官ヲ派シ國書ヲ修シ以テ日本國ニ謝スル事

修訂條規續約

日本國ト朝鮮國ト嗣後益親好ヲ表シ貿易ヲ便ニスル為メ

茲ニ續約ニ款ヲ訂定スル一左ノ如シ

第一

元山、釜山、仁川各港ノ間行里程今後擴メテ四方各五十韓里ト為シ
二年ノ後ヲ經テ條約批准ノ日ヨリ周歲ヲ算シテ一年トス更ニ各百
韓里ト為ス事

今ヨリ一年ノ後ヲ期シ揚花鎮ヲ開市場ト為ス事

第二

日本公使、領事及其隨員眷從ノ朝鮮内地各處ニ遊歴スル
任聽スル事

遊歴地方ヲ指定シ禮曹ヨリ証書ヲ給シ地方官証書ヲ驗ス
以テ護送ス

右兩國全權大臣各々

諭旨據り約ヲ立テ印ヲ蓋シ更ニ批准ヲ請ヒテ今月中日本明治五年

月朝鮮開國四百九十年 月 日本東京ニ於テ交換スル

大日本國明治十五年八月三十日

大朝鮮國開國四百九十年七月十七日

日本國辦理公使

花房義質

(印)

朝鮮國全權大臣

李裕元

(印)

朝鮮國全權副官

金弘集

(印)

右ノ條約ヲ締結セシ所以ノモノハ所謂明治十五年變亂ノ結果ナリ
以テ該變亂之概要ヲ畧述スル

明治十五年變亂以前ノ景况

當時朝鮮ノ内政ヲ見ルニ古來政權ノ爭奪ノ積弊ヲ受ケ
閔族ノ爭ヒ私黨ノ消長之上事トシ滿朝ノ大臣交々慘烈ノ禍言

三

ヲ授受レ血ヲ以テ政府ノ權勢ヲ交換スルモノ殆ド此國古來ノ因習
ナリ殊ニ哲宗崩シテ子ナク現帝ハ幼ニシテ王位ヲ継グ永シ大院君ハ
王ノ乃父ノ故ヲ以テ宮廷ニ坐シ政事ヲ聽キ遂ニ半島ノ執權ト
ナリ其威嚴ヲ振興セント欲シ旭日ノ登ルカ如キ執勢ヲ以テ半島ハ
道ヲ振動シ一國ノ輿論ヲ排シ世界ノ大勢ニ抗シ外專ラ排
外主義ヲ斷行シ内ハ不急ノ末木ヲ起シ國內ノ材貨ヲ蒐集
シ景福宮ヲ造營シ民カラ渴盡シ毫モ顧ル慶ナレ遇マ
佛團ガトリツシ教ノ蔓延スルヲ見テ將來團家ヲ害スルモノトナシ
道師及ヒ教黨ヲ殺ス一日ニ萬餘級ヲ以テ教ヲ至リテアト云
フ噫慘ナラスヤ而シテ佛團問罪ノ師ヲ發セシカ君之ヲ追ヒ又米
艦ノ來タリレヲ見テ端ナク之ヲ驅逐シ日本ノ使節ヲ斥ケ一時
威勢内外ニ振テ我明治七年征韓論ノ沸騰騰セシハ蓋シ之カ

為メテリ然ルニ世界ノ大勢力ハ遂ニ抗スヘカラス志ヲ得ズ執政ヲ奉還シ
テ野ニ下リシカ其潛勢力ハ依然トシテ失ハカリキリ明治八年八月朝
鮮沿岸岸測量ノ為メ派遣セラレタル我軍艦雲揚號ハ牛莊
ヨリ航行ノ途飲用水ヲ得ントシテ濟物浦ニ寄港水宗島ノ
前面ニ下碇スルヤ城兵發砲ス仍テ之ヲ砲撃シ沈黙セシメテ去
時ノ艦長井上良馨事ノ顛末ヲ東京政府ニ報シ其事件
重大ナルヲ以テ忽諸ニ附スヘカラストシテ我政府ハ詳細之ヲ取調べ
竟ニ兩國間ニ於テ之ヲ為メニ談判ヲ開始スルノ必要ヲ認メタリ於
是乎初テ朝鮮ノ獨立ナルヤ否ヤノ問題ヲ惹起スルノ止ムヲ得サルニ
遭遇セリ元來清國ハ朝鮮ヲ以テ其藩屬國ト為シ朝鮮國
モ亦清ノ冊封ヲ受ケテ正朔ヲ奉ジ朝貢ヲ為シ居ルノ實アリ該
砲撃ハ朝鮮國ニ向ツテ之ヲ質スルノ必要アルノミナラス又清國ニ對

シ談判ヲ開始セラルベカラストノ議アリ然レモ詳ニ其事毎員ノ關係ヲ
細本且スル片々名義ニ所謂大小ノ區別ヨリシテ或ハ屬國ノ形式ヲ有ス
モ安貞權ヨリ之ヲ見レハ朝鮮ノ獨立タルヲ証スルモノニシテ足ラズ以是
日本政府ハ之ヲ獨立國ナリトノ断定ヲ下シ黒田正使井上副使ヲ
渡韓センモ砲撃事事件ニ関スル談判ヲ開始セリ於是日本ハ朝
鮮ヲ認ムルニ獨立國ヲ以テセシガ故ニ米國ヲ始メ歐州ノ各國何レモ
獨立國トシテ朝鮮國トノ間ニ其條約ヲ締結スルニ至レリ然ルニ
清國ハ猶之ヲ屬邦視スルノ觀アリシテ以テ放擲シ置クノ能ハズ駐
清公使森有禮ニ命ジ同國ニ對シ此屬邦問題ヲ確メタルニ
同國政府ハ頗ル曖昧ノ答辨ヲ與テタリ此時大院君ノ排日熱ハ
頗ル劇烈ヲ極メシモ朴珪壽金名植等閔氏ノ一族平和主義
ヲ唱フルモノアリ終ニ大院君ノ議ヲ排シ日本ノ要求ヲ容レ明ク

九年二月二十六日條約ヲ締結セラレ京城ニ公使金山ニ領事ヲ駐在
 セシメ通商ノ條規ヲ定ム南米日韓ノ國交ニ層層歩ヲ進メ十五年
 八月元山ヲ十六年仁川ヲ十七年京城ヲ以テ互市場場トシ我商民ノ
 往來通商スルモ漸ク頻敏氣トナリシモ開國ノ常初自トシテ人心相
 和セサルモノアリ且朝鮮國事大ニ迷夢未タ破レガルト清人ノ執
 力廻カ我ヲ凌加憲レタルカ為メ遂ニ十五年ノ悲慘ナル事ヲ變
 生スルニ至レリ(松房辨理公使ノ赴任十年七月)

十五年ノ事亦變

大院君及其一派ハ此ノ形勢ヲ見テ枕ヲ高フスル一能ハズ隱然王政ノ轉覆
 ヲ企畫シ朝野ノ輿論ヲ叫合シ以テ機ノ至ルヲ待テリ十五年一月兵
 制改革ニ由リ從來ノ六營ハ廢セラレ新タニ壯禦武衛ノ三營ヲ
 置キ別ニ堀本中尉ノ指導ノ下ニ新式訓練ノ一隊ヲ設ルニ至リ

同年七月二十日数ヶ月ノ給料内漸ク其ノ月分ヲ在兵ニ支給スル
 得タリ然ルニ擔任ノ軍吏其間ニ立テテ私利ヲ握ラント欲シ録未
 砂礫ヲ混入シテ之ヲ給ヒリ此不法ナル支給ニ接シタル舊兵等ハ忽チ
 憤怒シ起ツテ該軍吏ヲ捉メ毆打シテ死ニ致セリ當時軍隊倉
 計事務總理関謙鎬之ヲ聞コテ大ニ怒リ令ラ下シテ兵士中
 謀者ヲ捕テ問フニ法ヲ以テシ兵士俄ニ激昂シ武器ヲ携ヘ
 隊伍ヲ組ミ走ツテ大院君ニ訴フル所アリ而シテ其一隊ハ鯨波ヲ
 揚ケテ関謙鎬ヲ即チ籠表ヒ又謙鎬逃シテ宮闕ニ入りテ暴
 兵之ヲ追フテ亦宮闕ニ乱スル遂ニ謙鎬ヲ殺シ後更ニ関右
 殿下ヲ求メテ事頗ル急ナリ殿下服ヲ変シテ後門ヨリ逃
 シ尹泰駿ノ即チ避ケ轉シテ安鼎王ノ家ニ隠シ更ニ関右
 植ノ別墅ニ月餘ヲ過コサセ給ヒテ且恭兵等鋒ヲ轉シテ時ノ領

議改本子最應ノ即ニ乱入シ又吏曹判書閔昌植ヲ襲殺ヒ共ニ之ヲ
 殺害シ其他閔族ノ邸宅率テ其蹂躪ヲ蒙リ慘害測ルヘカラ
 サルモノカリ而モ其凶徒中ニ兵士以外ニ開明ノ運勢ヲ慷慨ヒル
 不平黨ノ一派加ヒリ居リシ爲メ方面ハ更ニ轉シテ遂ニ我ク帝
 國公使館ノ襲撃ヲトケリ又即々同七月二十三日ノ薄暮ニシテ凶徒
 数百人隊ヲナシテ北當時西大門外天然高亭ニ於ケル我カ公使館
 ニ向ヒヌ時日本公使館員ニ十八名ヲ死カヲ竭シテ防禦スル雖モ衆
 寡分敵ヒス如何トモスヘカラス時ノ公使花房義質死ヲ決シテ道
 ヲ閉キ王宮ニ至リ國王ヲ守護シ王室ト死生ヲ共ニセントス血涙皆
 之ニ從ヒ門ヲ開キ群ヲ破リ南大門ニ至リ六門鎖シテ入ルバカス仍テ仁川ニ
 走り府廳ニ入り死カヲ以テ防守シ夜ニ入テ一漁舟ニ投シ牙山ニ航シ
 二十六日曉英國軍艦ヲライングワイン号ニ救助セラレテ長崎ニ還

我朝野為之憤慨征韓熱復起此變報一タヒ天津ニ傳ルヤ
水子中堂大ニ激罵キ以為日朝ノ破裂ハ絶東ノ平和ヲ破リ露國
ヲシテ東方ニ容嘴セシムル端ヲ開クト私ク其調停ノ任ヲ承シ且
洋艦隊司令長官丁汝昌ヲシテ其艦隊ヲ率ヒテ馬山浦ニ
吳長慶馬建忠ニ陸兵ヲ授ケテ京城ニ入ラシメ日韓平和ノ策ヲ
講セシム中堂ハ東方ノ知者日朝ヲシテ交戦セシムルハ過々露國東
方策ヲ助長スルモノトナス豈ニ宜ナラスヤ會々王妃木子中堂ニ許コテ
援ヲ乞フ於是中堂以後ク之ヲ和セシムルハ日本ノ衛点タル大院
君ヲ去ラシムニ如カスト八月大院君ヲ清國兵營ニ誘ヒ卒然天
津ニ囚送ス我政府ハ壯重ニ訓令ヲ與ヘ高嶋陸軍少將及
仁禮海軍少將ヲシテ兵ヲ率ヒ花房公使ヲ護衛シテ入朝セシ

4至レハ大院君ハ己ニ清國ニ囚送セラレ政論亦一變シホキ裕元金弘
 集其金権大臣トシテ濟物浦ニ會議シ我要求ヲ容レ條約ヲ
 締結スルニ至リシナリ所謂濟物浦條約是レナリ此ノ條約成リ
 テ後数月韓廷ハ朴泳孝ヲ特派大使トシ金晚植金玉均
 ヲ其副使トシ謝罪ノ國書ヲ齎シテ我邦ニ來朝セシム朝鮮
 國現行ノ國旗ハ當時ノ成業ニ係リ此際始メテ使用セラレタル
 朴金ノ徒が我邦ニ滞在スルヤ其文物制度及社會日新ノ状勢
 ヲ觀テ深ク感スル所アリ歸リテ之ヲ國王ニ奏シ摸範ヲ我々邦
 ニ取リテ朝鮮ノ政治及社會日刷新セシムラ期シテ回國シ次
 イテ間モナリ牛場卓造井上角五郎西氏ハ韓廷ノ顧問ト
 シテ渡韓セリ十六年一月竹添進一郎氏ハ奧平ケラレテ辦理
 公使トナリ入ッテ京城ニ駐劄レ同時ニ我守備隊モ入京スルト

ナリタルヲ以テ清國政府亦朝鮮政府ニ容喙シ政治干渉ス
ノ端緒ヲ開キ更ニ兵ヲ派シ兵權ヲ統督シ並ニ韓廷ヲ監督セ
ンカ爲メ目付役トシテ馬建忠ヲ駐在セシメテ此監權ハ遇テ清
國ノ野望ヲ助長スルノ具トナレリ

日本守備隊ノ駐劄

上述ノ條約ニ基キ守備隊トシテ派遣セラレタル第五師團(廣島)ノ
歩兵二中隊ニシテ少佐波多野毅之ヲ隊長タリ當時公使
館ハ泥岷ニ在リ公使館附近ニ兵舎ヲ設ケシメ其一中隊ヲ朴知
令(今ノ佛國耶蘇教會堂ノ所在地)ニ中隊ヲ和城基堂ノ下(今ノ
練兵場附近)ニ分駐セラレ
翌十六年三月第四師團(大坂)ノ歩兵二中隊ヲ少佐中岡黙然率來リ
之ニ交代ス